

「先真文明時代への覚書」 4. 生き方、暮らしの経済

2016.7.27、8.21、2017.1.25、2.18 加筆改訂

新生代第四紀、人類進化の現代史

自然物は適応進化を一時も止めはしない。この先真文明時代の中で、移行の順応を続けてきた。完新世末期の消費文明の中にも、自然物は適応して、新たなニッチを求めてきている。山から、シカ、サル、クマ、イノシシ、野生動物が人里に降りて山民の農作物を奪い、街に出没して都市民を襲う。彼らばかりではない。巨大都市と大陸間交通の文明に順応して、カヤゴキブリから病原菌まで世界中の都市にも移動して潜伏、定着増殖している。自然は非情だが、公正である。自然現象に備えなければ人々も家族を守れないし、野生と戦わなければ共存も共生もありえない。しかし、多くの人々は都市生活によって現実の自然を見失って畏怖心を脱落し、実物の食材や生活資材などの自然資源の生物多様性を活用する知識・技能も忘却しつつあるのではないのか。

人類の場合は意志ある選択が文化的進化によってある程度でき、野生獣のようにひたすら自然選択されるばかりではない。心の構造を発達させた人類の個体として、どのように人生を送るか、日々の暮らしをどのように成り立たせるのか。日々の人生を自律的に楽しく、幸せにするために、「自然」から生物文化多様性を学び、活かし、個人や家族の暮らしの経済を見直す必要がある。

たとえば、稲作単一民族説（柳田国男）に依拠した敗戦後農業政策における稲作一辺倒の結果は、過剰生産・減反政策の失敗、また、アメリカの食糧戦略にのって、コメ食・パン食の量的逆転が起こり、十分な食糧自給をせずにグローバル経済に依存・支配されることになった。まさに過誤への誘導がなされていた（明治維新+昭和維新以来の虚偽の政策の成果、残虐・卑劣な悪事をおかして勝てば官軍）。明治維新の偉大な成果の裏に、薩長閥政府が恣意的に隠してきた負の事実が郷土史家によって次第に明らかにされてきた。不都合な事実を消去した正史だけに抛らず、郷土史による自由な学びから何が事実（歴史）かを見極め、恐怖や虚偽によって操られた暗い人生を三度選ばないようにしよう。

暮らしの経済

家族や地域社会を守るためには、市民の自律的な経済活動を創らなければならない。まず、小規模自給農耕を勧めたい。暮らしの自律、特に家族食料の安全保障を確かにするために、家族農耕、市民支援農業 CSA、市民農園、コミュニティ・ガーデン、ファーマーズマーケットなどを展開する必要がある。都市・田舎を問わず、目に余る耕作放棄地を活用しなければ、農家も非農家も幸福にはならない。自ら土を耕しながら自然と向き合い、学び、自然素材を用いて自ら多くの物事を創作することは達成感が深く楽しい。パーマカルチャー、トランジションを進めよう。人生は素のまま美しく暮らす(sobibo)

ものだ。つつまじやか、簡素でもよいではないか。心から共感する友人はすでにかなりおり、世界中のいろいろな場所で暮らしている。交流は個人、家族、友人、地域社会から、民族、国も越えて世界まで広がっている。市民の側の望ましいグローバル化だ。

反面で、グローバル企業による種子生産販売、大規模農業による食糧、あるいは金融経済、エネルギーの寡占的支配も苛烈になっている。アメリカの農業食糧戦略や緑の革命の成果によって、日本を含む先進諸国の食の変化（栄養過多、とくに肉食の増大）が現代病気を拡大してきたことは、マクガバン・レポートやチャイナ・スタディなどで明らかになっている。さらに、地球環境問題（大量生産・消費・廃棄、環境汚染、気候変動）、自然災害（台風、地震、津波、噴火）、人為災害（原子力利用による放射性物質、自然界になかった化学物質、遺伝子組み換え化け物、限りなく続く戦争、差別・暴力、不公正・不正義、マスメディア、ITC）の恒常化、蔓延で、生き方、暮らしには危険がいっぱいになった。

このことを深く反省して、過剰な便利を求める科学技術の使用を、個人も、人々もほどほどな便利さに選択、自己制御するべきだ。たとえば、食の在り方をもっと「ゆったりスロー」にすることだ。食の生命倫理、必要量だけ作り、生ごみの量を減らし、できる限りリサイクルする。生命への畏敬・自然信仰を尊重して、良い素材による料理を食べ、人々・野生生物から飢餓をなくするのが良い。パーマカルチャーとトランジション活動によって、食料は自分で少しでも自耕自給し、獲得する野生の原則を再確認し、暮らしの仕事、生業を取り戻す。先真文明の時代を自覚して、ゆっくり、着実に文明の在り方を変えていく。自然ともう一度向き合う未来の暮らしのために伝統的知識体系の継承は重要である。身の回りの暮らしの経済こそが、地域社会の安定をもたらす。

末世カリユグの時代の先へ

しかしながら、現代は覚書2に書いたように末世カリユグの時代である。日本や世界の実情を次に列記してみよう。実に末の世と言うしかないではないか。

食糧の自給率（激減、昭和40年カロリーベースで73%から平成26年39%）、食糧輸入量（急増、平成17年小麦・トウモロコシ・大豆の85%以上、肉類47%）、食品ロス量（平成22年食品廃棄物1700万トン、内可食部分500~800万トン）、農家数（急減専業平成44万3千戸）、不登校者数（増加後横ばい平成25年小中高合計175,252人）、いじめ発生・認知件数（小中高合計、調査法が違うから比較できないが、昭和60年から10万件前後で横ばい）、自殺者数（増加後漸減、平成15年34,427人から平成26年25,427人）、交通事故死者数（増加後減少、過去最悪昭和45年の1万6,765人から平成25年の4,373人）。

さらに、現代的暮らしには解決すべき不幸は無数にある。自然災害（台風、洪水、竜巻、津波、地震など）も、人為災害（公害、汚染、汚職、失業、紛争、戦争、差別、貧困、飢餓）も限りなくある。近現代の最悪事例は、M. ホワイト（2010）「人類が犯した

20の大罪」によると、15世紀以降でもその死者数は、大西洋奴隷貿易（15～19C、1800万人）、ネイティヴ・アメリカン撲滅（15～19C、2000万人）、ナポレオン戦争（19C、400万人）、太平天国の乱（19C、2000万人）、英領インド飢餓（19C、1700万人）、コンゴ動乱（19～20C、800万人）、第一次世界大戦（20C、1500万人）、ロシア内戦とスターリン粛清（20C、2900万人）、中国内戦（20C、300万人）、第二次世界大戦（20C、5500万人）、毛沢東飢餓（20C、4000万人）と、まさに想像を絶する恐ろしい惨状である。

『ラーマヤン』（ツルシダース、池田運訳 2002）では次のように言っている。このカリユグの時代には、四方八方悪事が充満し、だれもが恐怖と苦痛にさいなまれて片時も心休まるときはないが、一つだけ偉大な功德があり、それはただ神のみ名を唱えるだけで安易に解脱位が得られることである。これほどの時代だからこそ、純粋な信仰心さえあれば、苦行・修行をせずとも、解脱できるというのだと理解してみた。

権力や権威の支配手段としての、宗教の強制が信仰を阻害する。アニミストは自然に沿った信仰だ。黒魔術に合意はしないが、祈りの儀式には賛意をもっても良いのではないのか。自然との関わりを失い、生命ある糧を頂く感謝を忘れ、尊大になることは、生き物としての人でなしだ。

人々には様々な、細々とした欲望が心の深層に蠢いている。それは善悪以前の、剥き出しの欲望である。これらの欲望の実行を制御するのは人類として順化してきた社会的行動、基盤の文化である。これは心の構造のどの部分か。剥き出しの欲望の発現は、抑制、促進ともに制御する心の構造を構成する微細部品、たとえば言えば螺子や発条、あるいは振り子や磁針、これらの緩みと緊張、歪みや捻じれによる衝動に基づく、非文化的、非社会的な異常行為である。即自・即時的に面白い、欲しいを制御できずに、行為し、自他を傷害する。便利な仮想現実のゲームは殺し合いの暗い欲望を代償するが、境界を見失った心は制御できずに行為する。真に神ならぬ身の奪われた生命は決して復活しない。退行期にある現代文明が欲望を刺激し、即自・即時的な発現を促進する、実に不審・不信の世である。

これら過剰な欲望の発現は、心の構造の発達、すなわち教養という文化的進化によって制御されるものだが、受験競争で縮んだ心の構造で、高い学歴が欲望の道具となつては、かえって教養の低下は免れなかった。

1948年のこと

私が生まれたこの年は波乱に富んでいた。K. M. ガンジーが凶弾に倒れ、J. オーウェルが『一九八四年』を執筆し、世界人権宣言が採択された。公的歴史が消し去ろうとも、黙殺しようとも、個人史、地方史の中に、残しておきたい物事がある。残しておけば再発見されるやも知れず、内村鑑三の言う「後世への最大遺物」として、未来世代の思索に役立つかもしれない。歴大の著作のうち、そうした優れた書籍が、現代人に価値観形成の基盤を与える。古典は大事だ。アナログの本を無くしてはいけない。デジタルは改

竄されるし、すぐに消し去れる。

黙っていれば、善事は掠め取られ、悪事は暴かれない。陰徳は消し去られ、虚偽がまかり通る。忘却の穴（オーウェル 1948）に放り込まれていく怒り、悲哀に悩まされ始めた。名声を求めてはいないが、個人人生をかけてなしたことが、ささやかなこととはいえ、身近な人々にとっても、忘却の穴にするりと投入されている。知足すべきだが、学問のバックグラウンドに敬意を示されないことに、不条理な悲哀を感じる。だから、地位を得た人々は権力や権威にしがみついているのだろう。でも、生涯、地位や名声に無縁の市民であったなら、そんな悲哀は感じないのだろうか。最初から諦めたのか、悟っているのだろうか。悟りを得て、ドロップアウトしたのだろうか。そんなはずはなく、志ある人々に自尊心がないわけではない。忘却の穴というのは、現代文明の基本的システムに組み込まれている。まず個人に、地域社会に、学協会や政治団体のような組織にも、結果的には大小の歴史にも……。

個人のうちにもこの穴はある。事績を記録しておかないと、忘れたいことも忘れたくないことも、忘れてはいけないことも、何もかもこの穴が吸い込んでいく。これで楽になることもあるが、自尊心が損なわれることもある。事実がすべての基礎だ。自己の名利を得るため、人の事績を掠め取る。単純な忘却、あまりに複雑な社会なので、記憶からあふれ出る。心理的負担を減らすために忘れ去りたい。意図的に忘れることにして、無かったことにする。集団内で黙殺する。いじめの本性は意識的無意識的に機能している。身近に機能すると、神経的につらい。厭世的になり、引き籠りたくなる。

職業ではない仕事

職業がたとえなくても、日々を生きるための仕事はある。仕事は生きるための営み、生業だ。名声や金銭を得るための職業ではない。名利がなければ行き難い社会ではあるが、無くても生きられるし、無い方が人々として自由・平等・友愛に生きられる。とはいえ、資本主義のこの世では相応の金銭や名利がないと、自由・平等・友愛も得られないこともある。どの程度で知足するかが個人の教養の高さだ。

名利を得れば、意見を聞いてもらえる。贅沢な暮らしができる。でも失うものやいらぬものも増える。自由を失う。世間に迎合するようになる。自分がなくなる。だから無名で好きなことをしたらよく、世間の評価、毀誉褒章を求めないのが良い。

人々を遊泳して名利に生きる。このような生き方を、私はもう久しくしてないし、他人の知足は思い測れないが、でも、こういう人も世のなかには必要だ。ほとんどの人が、小さなスマホの仮想世界の中で過ごしている。少し前まではテレビの中がほとんどであったが、スマホが架空・仮想、嘘世界の伝道物のアイドルになってきたようだ。

オリンピック、才能あるアスリートは素晴らしい。しかし、スポーツは万人が自ら楽しむもので、特別な才能の持ち主だけを観戦するだけのものではない。素晴らしいものを見て楽しむことと、自ら行って楽しむことは同等に、あるいはむしろ後者がより大切

だ。自ら行わないで、見るだけで、同一化して仮想現実に入る便利は人々を生物的にも文化的にも退化させる。莫大な税金を特別なことに偏重して使用するのはいくはない。文化的な生活が市民に満たされることが優先されるべきだ。オリンピックは返上しても、行政機関は福島原子力発電所の対応に全力を傾けるべきだ。福島の現実はとても深刻な状況だと推測できる。

幸福な暮らし

私は自然に近い場所に暮らし生きたい。植物の色香、畑の土の匂い、むらの農道、バザールの喧騒、美味しい手料理、人々の笑顔、子供たちの輝く眼差しが好きだ。

ビール造りの知人の家を訪ねた。彼はピーボ（キビの発泡酒）を醸してくださった方だ。畑のさらに奥、山間の谷津を詰めていくと、欧風の美しい家があった。周囲はイングリッシュ・ガーデンでたくさんの花々とハーブが植えられていた。広い居間で、彼の醸したビールと、妻女の手作りの昼食をいただいた。素材はすべて、有機無農薬の自家製野菜だ。居間の大窓は額縁のように掛かり、対岸の森を背景に、バタフライガーデンを中心に花々が展開しており、すばらしい景観を抽出している。私の好きなもののほとんどがここにあった。ご夫妻の自給知足ぶりに共感し、おもてなしに心もくつろいだ。

ボランティアとは市民が自らの意志で、自分の金、労力および時間を使って公共の仕事をする事だ。行政は市民から集めた税金で、職業として給金をもらい、公共の仕事をする。企業は客に品物やサービスを提供して、あるいは公共の仕事をして、見返りの金を受け取る。客は金を支払って、サービスを受ける。どれも必要なことではあるが、心持に大きな違いがある。

世界市民は、自由、平等、友愛を求める自律した個人である。この個人は伝統的には家族、民族の属性をもち、近代的には地域市民、国民の属性をもつ。ただし、現在は移民、難民、無国籍など、不幸にも困難な状態にある人々も少なくない。世界市民は個人がそうであろうと意思するものであって、各地で増加しているが、まだまだ相対的には少数かも知れない。それでも、意思して世界市民であろうとする人はいるだろう。

絶滅危惧種のように希少を尊ぶことはよし悪しである。現場に生きている、希少の当事者からすれば、なにゆえ希少に追い込まれたのか、それでも生きていることの意味が大きいことを語るべきである。希少性を良いことのように利用するノスタルジーは現場の当事者のものではない。当事者でないから同情するかのよう悲壮にも美麗にも描けるのだ。

ましてや、少数民族のような社会的マイノリティの現実に敬意を払わないのは気に入らない。日本にもフンザやラダックのような場所は各地にある。これらは遅れた理想郷などではない。山間地の厳しい現実を精いっぱい暮らしているところだ。日本人は伝統的な暮らしを大切にせずに、見捨ててきた。明治維新政府が創った脱亜入欧の現代創作神話にいつまでも呪縛されたままである。東洋と西洋の美の意識の違いは、素のままの

自然美と創られた人工美に見て取れる。別ものであっても良いし、融合を意識する自然と調和する人工美もあってよい。

若者に何を残す

若者に向かって話す言葉を失ったと感じた。大人が話せば存在自体が重く（うざく）なり、彼らに沈黙を強いているのかもしれない。求められなければ話さず、思いは書くことで果たすべきであると考えようになった。大人がしでかした不始末の解決を次世代の子どもに押しつけないで、大人が解決して見せることだと、ある若者は言った。できるだけ負の遺産を残さないように、経験を伝えたいと思うが、おおかたは余計なお世話なのかもしれない。

静かに、安心して、自然に沿って、幸せな人生を過ごす別の暮らしはある。各地の人々の幸せや不幸にも、心情を寄せる人の道だ。今の私は大人になったので、青少年のころのように、人の生き方を全否定も全肯定もしない。人が生き方を磨くには課題を見つけて、さらに良くなるためには、部分肯定と部分否定がいる。足るを知ることは最終的な解脱だが、生きているうちは部分の不足を課題として見つけては、さらに地道に改善努力を続けることだろう。

（国際シンポジウム場の教育分科会「生き方、暮らしの経済」のために用意した資料に加筆）